

## < ナガミヒナゲシ・アツミゲシの分布調査 >

ナガミヒナゲシ (*Papaver dubium* L.) ケシ科ケシ属



ナガミヒナゲシ (*Papaver dubium* L.) ケシ科ケシ属  
原産地は地中海沿岸。一年草または越年草。茎や葉には毛がやや密に生える。茎は高さ10～60cmで直立し、大きい株では上部で分枝する。葉は1～2回羽状深裂で、茎葉では基部の裂片が大きくなり3出状になる。花は春から初夏、枝の先端に単生。大きいもので径約5cm、つぼみの時は下を向いていて、2枚の長い開出毛が密生する萼片に包まれているが開花時に直立し、萼片が脱落する。花弁は十字対生する4枚で朱赤色。雌蕊は花柱がなく、柱頭は円錐形で4～8本の放射条がある。雄蕊は多数。挿花は長卵型で無毛、熟すと薄茶色になり先端の円盤の下に隙間ができ、隙間から種子がこぼれ落ちる。麻薬成分を含まないので、栽培は禁止されていないが、ケシと交配する可能性を示唆した論文がある。近年道路端や畑で急速に増加しており、リスク評価が必要である。  
(「外来植物の科学成分と雑草性リスク評価」  
(独)農業環境技術研究所 2008)

各地で野生化し、近年都市部で急激に生息域が増化しているといわれています。

周南市でも街中のいたるところで咲いていて、オレンジ色のじゅうたんのような花畑になってしまっています。花壇、公園、空き地、路側帯・分離帯、街路樹の下、植え込み、溝の中やコンクリートの壁まで・・・都市部だけでなく、里地・里山にも侵入し始めています。花がきれいなので、突然生えてきても、花壇やプランターがいっぱいになっても、抜かれずに残されていることもよくあります。

最近では、誰も手入れしない道路端が増えてきたので、落ちた種子が車のタイヤなどでも散らされたり、運ばれたりして、昨年1本もなかった場所が群落になったりしています。



「ナガミ」という名前は、実が長いことから付けられました。

「ケシつぶのような」という比喩表現があるように、ものすごく小さい種子が、長い実の中にびっしり詰まっています。

← 5～2cmの種子で700～1200個の数のケシ粒が入っています。(左の写真)

← 花が終わると次第に薄茶色になり、隙間から種子が散布された後は、見苦しく突っ立って残っています。

← 小さいものでは、花の高さは、1cm～3cm。1cmの花にも、実がなり、種ができます。正直なところ、除草していると、気が遠くなりそうです・・・。



### 市街地には拡がりすぎてどうしようもないのでしょうか？

すべてをなくすのは難しいと思います。でも、まだまだ市内にも生えていない所はたくさんあります。庭に咲いている場合は、花を愛でた後は、種ができる前に取り除くか、抜いてください。これ以上拡げないでください。車などにくっついて侵入してしまった「ケシ粒」が、花を咲かせても、最初の1本を取り除いて種子の拡散を防ぐことで、「増殖」しないで済みます。

**外来植物の防除は、早期発見！！早期治療！！  
侵入したての時に除去することで、拡散を防げます。**

## アツミゲシは“アヘン法で栽培が禁止！！知らないは大変？！”

日本ではアヘン法で栽培が原則禁止されている種に指定されており、自生や厚生労働大臣の許可を得ていない栽培を発見したら警察や保健所に通報する義務がある。なお保健所や警察においては学名の種小名に由来するセティゲルム種と呼ばれることが多い。



←周南市で見つけた群落を保健所や市の方たちと防除しているところ。

『1964年の最初の発見当時は、愛知県警のみならず自衛隊まで出動する騒ぎとなり、火炎放射器や重機を繰り出して駆除に及んだ。その後際限なく駆除が繰り返されてきたが、未だ根絶されていないどころか、現在全国各地に事実上定着している。原産国や同様に帰化した国から

輸入された肥料などに種子が紛れ込んでおり、気が付いたら道端や放置された草むらなど、その辺に勝手に生えているのが現状であり、その都度警察や保健所が出動する騒ぎが繰り返されている。』

(フリー百科事典「ウィキペディア」)

### アツミゲシ (*Papaver setigenom*) ケシ科

北アフリカ原産で世界の各地に帰化している越年性草本。秋にロゼットを形成し、春に茎を伸ばし、まばらに分岐して高さ80cmほどになる。茎の上部や葉の裏面葉脈上に長さ3cmほどの肉質の剛毛がある。茎生葉は長楕円ひ針状で通常深裂し、鋭鋸歯があり、無柄で基部は耳状に茎を抱く。春から夏にかけて茎の先端に直径6cmほどの4弁花を着け、花弁は赤～濃紫色でしばしば大きな斑紋がある。果実は直径1.5cmの長球形で先端に5～9本の放射線のある柱頭が残る。1964年に愛知県で報告され、本州から九州まで市街地や荒地に散発的に発生する。

ケシ (*P.somniferum*) ほどではないが、未熟果実にモルヒネを含むため、麻薬取締の対象になっている。

### ＜ アツミゲシとナガミヒナゲシの違い ＞

	<h4>ナガミヒナゲシ</h4> <p>花の色はオレンジ色。 名前の由来は、実が長いから。</p>		<h4>アツミゲシ</h4> <p>花の色は赤紫色。 名前の由来は、我が国で初めて自生が確認された場所が愛知県渥美半島の沿岸部だったから。</p>
	<p>葉は分裂葉で、やわらかい。 表面に毛が生えている。</p>		<p>葉の表面に毛が生えている。葉には鋸歯があって、茎を抱いている。 散布された種が秋に発芽してロゼットを形成し、春に茎を伸ばす</p>
	<p>実は長い形。 麻薬成分は検出されない。 ケシ粒のような、という比喻があるように種子は非常に小さく、分布の拡散スピードが速い。</p>		<p>実は丸い形。 切った液から、麻薬成分が検出されるが、ごく微量であり、麻薬採取にはソムニフェルム種が用いられるのが一般的である。</p>
<p>現在は、栽培しても良い種と、紹介されている。アツミゲシとの交雑で、種に麻薬成分が含まれるようになる懸念もあり、研究が進められている。 景観上においても、群落を形成しやすいため、要注意外来植物に指定するかどうかについて、検討されはじめている。</p>		<p>栽培禁止植物なので、見つけたら、もよりの保健所か警察に連絡する必要がある。 毎年5-6月に自治体などの栽培禁止キャンペーンがあるが、あまり周知されておらず、その辺に生えてきた花だが美しかったので栽培していた、というケースも多い。警察から事情聴取された人もいる。</p>	